

東京の住宅地における住民階層の比較研究

吉田 啓子

大学に入学して初めて東京に住んでみて、何の先入観もなしに自分なりに住宅地について感じる場所があった。東京都区部の“山の手”と称される地域でも住宅地としてかなり違いがあるように思えた。住宅地のうち“一流の住宅地”や“高級住宅地”というのはどのような社会階層の人々が居住しているのであろうか。またそれらの住宅地はどのように分布し、どのように形成されていたのであろうか。これらを明らかにすることがこの研究の目的である。

研究の方法としては、まず都区部の住宅地のうち山の手の特徴を調べる。その分析には昭和45年と昭和55年の国勢調査と昭和43年と昭和53年の住宅統計調査を使用する。次に上の分析結果から山の手を通る2つの私鉄を取り上げ、その沿線地域の住民特性の傾向を調べる。その分析には東京都町丁目別国勢調査報告書を使用する。そしてその分析結果からそれぞれの沿線地域の中で特徴ある町丁目を取り上げ、住宅地としての開発の過程を明らかにする。

以上の方法で研究を進めていった結果、“山の手”地域の中で東急東横線の沿線地域64町丁と西武池袋線の沿線地域80町丁をとり上げ、8変数（老年人口比、大学卒業率、役員比、1世帯あたり人員、1人あたり畳数、持家率、10年以上居住者率、過去5年以内居住者率）を使用して各沿線ごとに平均値・標準偏差を求め、それをもとに

4段階に分類し、分布図を作成した。以上の分析から、大学卒業率、役員比、1人あたり畳数、持家率等が概して平均より高い、いかえれば相対的に豊かなホワイトカラー的な階層が多く、広い自分の家に住んでいるというような町丁は、東急東横線では学芸大学駅を境に南西側、西武池袋線では向山3丁目、西落合にみられることが明らかになった。

そこでそれらの地域の開発の過程を明らかにしたところ、東急東横線では学芸大学駅南西側の目黒区旧碑倉村地域、西武池袋線では練馬区向山3丁目の両地域とも、自然発生的に出来上がった街ではなく、計画的に造られた住宅地が多いということが明らかになった。目黒区旧碑倉村は田園都市会社（現東京急行電鉄）の土地開発と周辺の地主による耕地整理により住宅地としての基盤が造られた。また向山3丁目はセカンドハウスとして意識の高い人々により開発された。つまり、現在いわゆる高級住宅地といわれている街、すなわち最終学歴が大学以上で、現在会社役員などをつとめ、家は持家で間取りも広い、というようなホワイトカラーが多く住んでいる地域は自然発生的に街が出来上がったのではなく、計画的に造られたものであり、また、人々がそこに住み始めた当初からすでによい環境にあったということがわかった。

那珂湊市阿字ヶ浦周辺の風成地形に関する考察

吉野 喜久子

風成地形とは本来風食地形と砂丘の両方をさすものなのだが、湿潤で植被の多い日本では風食地形の発達が悪く微地形的にしか存在しない。ただ

しそれらは発達が悪いゆえに形成過程が研究しやすく、小規模で長く保存されないから一般の地質学的尺度では研究し難い沖積世以降の地形発達史、